海外研修報告～マレーシアにおける野生動物管理～

小林　祥（WMO）

WMO は、野生動物保護管理に貢献する上で必要な情報収集及び技術の取得を目的として、自主的な企画に基づく海外研修制度を設けています。私は本制度を利用し、2023 年 8 月にマレーシアに行く機会を頂きました。今回、東京都立大学とマレーシア工科大学の合同調査に同行させていただき、ジョホール州とサラワク州の国立公園や現地の森林局を訪問して来ました。

〇海外研修制度利用のきっかけ

人と野生動物が共存していくためにはどうしたらいいのか。野生動物管理に関わる人ならだれでも考えたことがあるかと思います。私にとっては、この問いについて自分なりの答えを追求し、実現していくことが目標の一つであり、仕事のモチベーションにもなっています。今回、社内の海外研修に応募するに至ったのもこの問いの答えに少しでも近づけないかと思ったからです。

私が人と野生動物の共存について、考えるようになったのは学生時代からです。私は学生時代、マレーシアの熱帯雨林を研究対象地として、野生動物の研究を行っていました。熱帯雨林は、野生生物の宝庫といわれ、陸地の７％を覆っているに過ぎませんが、地球上の生物の 50～80%が生存すると推定されています。しかし、近年は開発による森林伐採や密猟により、多くの野生動物が絶滅の危機に瀕している状態です。学部４年の時、野生動物の知識も全くない状態でマレーシアに飛び込んだ私ではありましたが、熱帯雨林に魅せられ、そこに住む野生動物を絶滅させたくない、守りたいと強く思いました。当時の私は、野生動物の生息地を人間活動から守る、希少種を密猟から守るといった保全の側面でしか見ていませんでした。

大学卒業後、WMO に入社し、野生動物の管理について初めて知ることになります。増加するシカの個体数、サルやイノシシによる農作物被害など、日本では野生動物を管理し、調整していく側面が強いと思います。そして、入社後の２年間で糞塊密度調査やサルのカウント調査などのモニタリング、シカの個体数調整、複数機関をまたぐ広域管理体制の構築など、様々な業務に携わるなかで、マレーシアでの野生動物管理はどうなっているのか、マレーシアのフィールドを再び見てみたいと思うようになりました。日本の野生動物管理を日々学んでいる私ですが、心の中には常にマレーシアがあったのです。そして有り難いことに再度マレーシアを訪れる機会を頂きました。

〇ジョホール州・エンダウ・ロンピン国立公園

最初にジョホール州にあるエンダウ・ロンピン国立公園を訪問しました。マレー半島の中でも 2 番目に大きな国立公園であり、トラやヒョウ、ウンピョウなどの大型の食肉目、アジアゾウやマレーバクなどの有蹄類、シロテテナガザルやリーフモンキーなどの霊長類など、24 種の絶滅危惧種を含む 150 種近くの野生哺乳類が生息している熱帯雨林が広がっています。

州都のジョホールバルから国立公園の最寄り町であるカハンまで車で２時間半、そこからさらに核心部にあるペタまで２時間ほどかかりました。カハンからペタまではアブラヤシのプランテーションの中のダート道をひたすら進んでいきます。

エンダウ・ロンピン国立公園は完全にアブラヤシのプランテーションに囲まれているのです。アブラヤシは食品などに用いられる食用油パームオイルの原材料です。マレーシアはインドネシアと並んでパームオイルの主要生産国であり、大規模なプランテーションが広がっている様はマレーシアの至る所でみられます。1970 年以降のプランテーションの急速な開発拡大により熱帯雨林の減少が危惧されてきました。国立公園をはじめとする自然保護地域は熱帯雨林とそこに生息する野生動物の保全に重要な役目を果たしているのです。また、現地の人の話では近年、国立公園内のアジアゾウの個体数が増加しているそうです。というのも開発によって生息地を追われた個体がサンクチュアリである国立公園に集まってきているためです。その為、国立公園周辺の村では人との衝突も発生しているそうです。

国立公園内の宿舎に到着すると、我々を歓迎してくれたかのようにリーフモンキーの群れが宿舎のすぐ横の木々にやってきました。霊長類やリス科などの樹上性の哺乳類は、熱帯雨林において比較的簡単に観察することができます。

写真１　国立公園の周囲に広がるアブラヤシのプランテーション

写真２　船に乗って森へ
現地の先住民オランアスリがガイドとして案内をしてくれた。

写真３　ネイチャートレイル

写真４　アジアゾウの糞

国立公園内でのメインのアクティビティはジャングルトレッキングです。30m 以上もあるような巨木から１ｍほどの低木まで空間すべてを植物が繁茂している文字通り「密林」を歩きます。野生の哺乳類を直接見る機会こそなかったのですが、ゾウの糞がごろごろ転がっていたり、カワウソの足跡があったりと見どころがたくさんありました。公園内のトレッキングにはガイドの同行が義務付けられていますが、ガイドは現地の先住民族であるオランアスリの人々が担っています。オランアスリは元々、マレーシアの森林に住み狩猟をして暮らしていた民族でした。しかし、国立公園内の指定によって、先祖の土地を奪われ、狩猟等が制限させられたことで、国との対立があったそうです。国立公園ではオランアスリにガイドを担ってもらうことで、彼らにお金を落ちるようにしています。また、古くから森で暮らしてきた彼らの文化や工芸品はエコツーリズムの要素にもなっています。

〇サラワク州・バコ国立公園

研修の後半では、ジョホールバルから飛行機で約 1 時間 30 分の距離にある、ボルネオ島北西部のサラワク州の州都クチンを訪れました。ボルネオ島はマレー半島とフィリピンの中間に位置する世界で３番目に大きな島で、マレー半島と同様に広大な熱帯雨林が広がっています。しかし、動物相は異なり、野生のオランウータンが生息するのはボルネオ島だけです。

今回、サワラク州森林局（Sarawak Forestry Corporation : SFC）の方に案内してもらい、州で最も古くに設立されたバコ国立公園を訪れました。SFC はサワラク州の 47 の国立公園を含む 67 の自然保護地を管理しています。バコ国立公園では、熱帯雨林やマングローブ林、数多くの奇岩が乱立する浸食地形の海岸など多様な景観が楽しめるネイチャートレイルが数多くあります。これらのネイチャートレイルは比較的歩きやすく、場所によっては綺麗に木道が整備されているのが印象に残りました。というのも、熱帯雨林での主要な観光アクティビティであるジャングルトレッキングは通常、高温多湿の環境ということもあり過酷なものになりがちです。観光客にとって安全で快適なアクティビティを行えるということは、自然観光地において観光客の満足度を上げる重要な視点の１つであると思います。

バコ国立公園では半日程度の滞在ではありましたが、ヒゲイノシシ、シルバーリーフモンキー、ヒヨケザルの３種の野生哺乳類に遭遇しました。驚いたことにこれらの動物は人慣れしておりとても近い距離で観察できました。ヒゲイノシシに限っては、主要な観光拠点の一つであるビジターセンターの裏手を堂々と闊歩しており、人間を気にする素振りもなくお腹を向けて寝ていました。日本の山でイノシシに遭遇した時の緊張感はそこにはなく、なんだか拍子抜けしてしまいました。近くの道際にはイノシシの掘り返しや糞が多く見られましたが、公園を管理している現地の人たちは全く気にしていないようでした。現在、餌付け等はしていないとのことです（過去にはあったらしい）。野生動物を容易に観察することができることは観光資源の一つにはなり得ますが、あまりにも人と野生動物の距離が近いと予期せぬ事故も考えられ注意が必要です。また、実はヒゲイノシシは IUCN のレッドリストで危急種（VU）に位置付けられている希少な動物でもあります。現在、マレー半島で猛威を振るっているアフリカ豚熱（ASF）が、国立公園の訪問客を通して持ち込まれることによって、ヒゲイノシシに多大な影響を与える可能性もあるのです。人と野生動物の適切な距離間については、今後考えていかなければならないことだと思います。

写真５　バコ国立公園（サワラク州）
熱帯雨林やマングローブ林など多様な景観が観られる。

写真６　人慣れしたヒゲイノシシ
観光客が近づいても逃げることはない。

〇マレーシアにおける野生動物管理

今回の研修では、マレーシアの野生動物管理に焦点を当て、現地の国立公園や森林局を訪れました。全体を通して感じたのは、国立公園をはじめとした自然保護地域が自然を保護するだけでなく、観光資源としても積極的に活用されているということです。国立公園は地元住民の憩いの場となっており、マラソン大会などのイベントも開催されており、国外の観光客にはシンガポールや欧米からのパッケージツアーも提供されています。観光は野生動物保全のための資金と動機を提供する強力な手段として機能していると感じました。日本でも同様に、観光資源としての自然を活用することで資金不足の問題に対処できる可能性があると思います。

マレーシアの国立公園では入場料が取られていますが、日本の国立公園ではそのような制度はありません。マレーシアの国立公園はアメリカやカナダの国立公園のように公園当局が所有権など土地の権限を持っています。一方、日本の国立公園は地域性自然公園として指定され、環境省が管理していますが、土地の所有者は国、地方自治体、民間と異なります。このため、日本の国立公園では土地所有者間の利害対立が生じることがあり、物事が進みづらい場合があります。

さらに、マレーシアは日本以上に縦割り社会であると感じました。マレーシアの国立公園は国ではなく州ごとに管理されています。例えばジョホール州の国立公園はジョホール国立公園局（Johor National Parks Corporation）が管理していますが、州内の自然保護地域の森林はジョホール州森林局（Johor State Forestry Department）という別の組織が管理しています。そして、州をまたいだ広域管理はあまり進んでいないように感じました。今回訪れたジョホール州のエンダウ・ロンピン国立公園はパハン州との境界に位置していますが、パハン州側は州立公園としてパハン州が管理しています。マレーシアでは行政単位として国の下に州がありますが、州にはスルタンという王様（君主）がおり、州ごとに統治機構や権限が異なるため、管理上の課題が生じる可能性があります。ちなみにエンダウ・ロンピン国立公園はジョホール州のスルタンのお気に入りで、園内には専用のシャレー（宿泊施設）がありました。

マレーシアにおいて観光地として自然の利用が進む一方で、人と野生動物の距離感が近すぎる点が気になりました。先に述べたバコ国立公園のよ

うな国立公園内の話だけではありません。特にニホンザルと同じマカク属であるカニクイザルはちょっとした森に面している街中や現地の大学の構内に頻繁に出没し、ごみをあさったり人から食べ物を奪い取ったりしています。そんな場面でも現地の人々は見慣れたように生活しているのも印象的でした。人と野生動物の距離感が我々日本人とマレーシア人ではっきりと異なっているのだと思います。残念ながら、現地でどのようにカニクイザルの問題に対処しているかはよくわかりませんでした。一部の地域で捕獲を実施しているという話も聞きましたが、管理は上手くいっているのでしょうか。日本でのサル管理のノウハウを導入できるところもあるかもしれません。今後も情報収集していきたいと思っています。

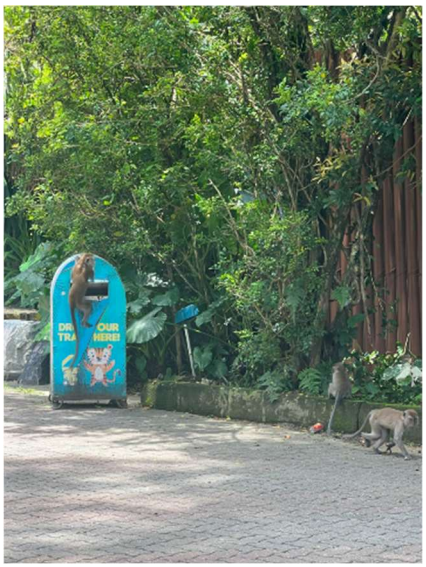

写真７　動物園内の野生のカニクイザル
観光客を威嚇し、食べ物を奪う個体もいる。

最後に、今回の研修では学生時代に見てきたマレーシアとはまた違った側面を感じることができました。WMO で日本の野生動物管理に従事してきた数年間が私自身のものの見方を変えたことを実感しました。そして、何より私は野生動物が好きであり、また野生動物管理という仕事が好きであることを再確認できたことを嬉しく思います。

表紙の絵

そろそろ角でも落として年度末を迎えるかな。

あ～肩こった。

大西　勝博（WMO）